

## ルカによる福音書17章11-19節 「感謝して、引き返す信仰」

### 1A らい病の癒し 11-14

1B 十人の汚れ 11-13

2B 清めと祭司 14

### 2A 真に救われた一人 15-19

1B 当然の応答 15-16

2B 恵みを当然と思う九人 17-18

3B 救われる信仰 19

## 本文

ルカによる福音書 17 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 16 章まで来ていますが、午後に 17 章を一節ずつ学びます。今朝は、11-19 節に注目したいと思います。「11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。12 ある村に入ると、ツアラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かると、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。17 すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。18 この他国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」」

私たちは聖書通読の学びをしています、ルカによる福音書の中の話でも、旅の途中になっています。イエス様がエルサレムに向かう旅に向っていることを、9 章の 51 節から知ることができませんが、それ以降、イエス様はご自身がエルサレムで苦しみを受け、十字架に付けられ、それから甦られることを意識しながら歩まれていました。ここでも、「エルサレムに向かう途中」とあります。ですから、イエス様が、ご自身が来られたことによって神の国が近づいたという宣教もありながら、なおのこと、それでも受け入れない人々がいる、そして最終的には拒まれるということを意識しておられるということです。そして、弟子たちを、それでもついて行く弟子とするということを念頭に入れながら語っておられるようになっていきます。そこで今、読んだ出来事にもその面があります。それは、「癒しを受けたけれども、その恵みを本当に受け入れているか？」ということです。主から憐れみを受けたけれども、そのことに感謝して、応答しているのか？ということです。それでは、じっくりと見ていきましょう。

## 1A らい病の癒し 11-14

### 1B 十人の汚れ 11-13

11 さて、イエスはエルサレムに向かう途中、サマリアとガリラヤの境を通られた。12 ある村に入ると、ツアラアトに冒された十人の人がイエスを出迎えた。彼らは遠く離れたところに立ち、13 声を張り上げて、「イエス様、先生、私たちをあわれんでください」と言った。

サマリアとガリラヤの境にある村で、ツアラアト、つまりらい病に罹った十人の人が出迎えました。彼らのほうから来ている感じです。十人という数字が、私は初めに目に留まりました。聖書では、ダニエルが十日間、野菜だけを食べてそれでも顔の肉付きがよいかどうか試してくださいと言っている場面がありました。スミルナの教会では、迫害を受けて、十日間試されるともあります。十は、なにか試されるという意味合いがありそうです。らい病人たちは、イエス様から清められた後に試されることになりましたね。

ここで「遠く離れたところに立ち」とあります。それは、らい病は汚れたものとみなされ、触れたらその人も汚れることになるからです。彼らはユダヤ人の共同体の中に入ることができません。レビ記 13-14 章に、らい病についての細かな規定がありますが、13 章 45-46 節にこうあります。「レビ 13:45-46 患部があるツアラアトに冒された者は自分の衣服を引き裂き、髪の毛を乱し、口ひげをおおって、『汚れている、汚れている』と叫ぶ。その患部が彼にある間、その人は汚れたままである。彼は汚れているので、ひとりで住む。宿営の外が彼の住まいとなる。」映画ベン・ハーを見れば、当時のらい病人たちが、いかにして人々から離れた所に住まないといけなかが、描かれています。私たちは、心にある汚れに注意しないといけません。「ヘブル 12:14-15 すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることができません。れも神の恵みから落ちないように、また、苦い根が生え出て悩ませたり、これによって多くの人が汚されたりしないように、気をつけなさい。」らい病のゆえに遠くに立たないといけませんでした。

### 2B 清めと祭司 14

14 イエスはこれを見て彼らに言われた。「行って、自分のからだを祭司に見せなさい。」すると彼らは行く途中できよめられた。

イエス様は、「祭司に見せなさい」と言われますね。これは同じく、らい病人についての規定で、レビ記 14 章に、清められたことを祭司に確かめてもらい、それで清められたことが確認されたら、いけにえを献げるなど儀式を経て、イスラエルの共同体の中に入ることができるようになります。ちょうど、現代に分かり易く話すなら、癒しの奇跡が人の体に起こりました。けれども、本当に癒されたのか確かめたいです。それで医者のところに行きます。似たような形で、祭司のところに行き、清められたことを確かめてもらうのです。

ところが、ここで律法の中だけには、らい病が清められることそのものの約束は書かれていないのです。清められたら、祭司のところに行きなさいとはあっても、清められるということはないのです。ですから、14章だけ読むと、肝心の部分がないので自ずと主の介入を求めるようになります。らい病が治る時に、そこには神が介入されていることがわかるのです。ですから、イエス様がらい病を治されることは、まさに神が来られたということを意味していました。「ヨハ 1:17 律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである。」

## **2A 真に救われた一人 15-19**

次に、癒された彼らの反応があります。

### **1B 当然の応答 15-16**

15 そのうちの一人は、自分が癒やされたことが分かったと、大声で神をほめたたえながら引き返して来て、16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した。彼はサマリア人であった。

癒されたことが分かりましたら、一人だけが大声で神をほめたたえています。そして、祭司のところに行かないで、引き返しています。イエス様の足元にひれ伏して、感謝するためです。私たちは、これだけの大きな恵みを受け取ったのであれば、大声で喜んで、神をあがめて、そしてそれをしてくださったイエス様の前でひれ伏して感謝するのは、当然の応答だろうと思いますね。けれども、十人のうち、一人しか反応しなかったのです。しかも、ユダヤ人でもないサマリア人だったのです。私たちはこういった出来事を読めば、このサマリア人の行動こそが、当然出て来ることだろうと考えるでしょう。ところが現実には、神の働きが自分の身に起こっても、特に反応しない人が多いのです。ここでは、十人のうち、なんと九人がそうした霊的無感覚の状態に陥っています。

主に示されたのに、主によくしてもらったのに、恩を仇で返すというか、恵みをきちんと受け取っていないのです。ベルシャツアルのことを思い出します。彼はバビロンで最後の王となりましたが、彼が殺される日、大宴会を催していました。酒の勢いで、なんと偶像を賛美していました。その酒の器を、なんとネブカデネザルがかつて、エルサレムの神の宮から取って来た、神の宮で使っていた器で飲んだのです。その時に、塗り壁に人の手の指が現れました。それで、ベルシャツアルはすっかり怯えてしまいましたが、ダニエルが呼ばれたのです。彼が解き明かすことができると聞いたからです。けれどもダニエルは、それを解き明かす前に、ベルシャツアルに裁きの宣言をしました。「ダニ 5:22-23 その子であるベルシャツアル王よ、あなたはこれらのことをすべて知っていながら、心を低くしませんでした。それどころか、天の主に向かって高ぶり、その宮の器を自分の前に持って来させ、あなたと貴族たちとあなたの側室や侍女たちは、それを使ってぶどう酒を飲みました。あなたは、見ることも、聞くことも、知ることもできない銀、金、青銅、鉄、木、石の神々を賛美しました。しかしあなたの息をその手に握り、あなたのすべての道をご自分のものとされる神を、あなたはほめたたえませんでした。」ベルシャツアルは、祖父ネブカドネツアルが高ぶって、獣のよう

になって七つの時を過ごしたことを彼はよく知っていました。それにも拘らず、神の器を使って、偶像をこのようにして賛美したのです。

## 2B 恵みを当然と思う九人 17-18

17 **すると、イエスは言われた。「十人きよめられたのではなかったか。九人はどこにいるのか。18 この外国人のほかに、神をあがめるために戻って来た者はいなかったのか。」**

私たちが、自分は今、十人のうち、一人のサマリア人のようか、それとも九人のイエス様のところに来なかった者なのかを吟味しないといけません。それは、神の祝福をあまりにも当たり前に取り、そこに感謝による応答がなくなっていることです。感謝による応答とは、ここでサマリア人が引き返したように、なんとなく、漫然と暮らすのではなく、明らかに意図的に、意思をもって感謝するのです。

私たちが、ここまで生きているということは、人生の中で何度となく、もう少しで怪我をするところだった、物が盗まれるところだった。あるいは死んでしまうかもしれなかったという出来事があったかもしれません。交通事故にあった、であるとか、家の鍵を閉めるのを忘れていたとか。先週、私はなんと、財布を忘れて、しかもスイカのカードまで忘れて、回数券で地下鉄に乗ってしまいました。しかも、それは200円の切符ですが、乗った料金は240円です。目的の駅まで着いた時に、友人改札のところに行き、そのままお金がないことを告白しました。財布もスイカも忘れてしまったことも有体に話しました。すると、なんと、「今回だけです、そのまま改札を通ってください。」と言われたのです！私は嬉しかったというか、あまりにも恐縮で、何度も何度もお辞儀をしました。けれども、今、こうやって皆さんにお話ししていなければ、私自身、数日前のことなのに忘れてしまったかもしれません。その感謝の思いを忘れてしまうかもしれません。詩篇の著者はこう言います。「103:2 わがたましいよ【主】をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」

ところが、そういう感謝すべきことが十あったとしても、一つの嫌だなと思ったことはしっかりと覚えていてます。その十あったものは神の働きであるとは思っておらず、その一つのことによって、「なぜ、神はこんなことをお許しになるのか？」ということです。十のことは神のしたことと数えていないのに、その一つのことについては神のしたこととして数えているのです。これが人の罪の性質としてパウロがローマ1章で語っています。「1:21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」

ですから、感謝は、このサマリア人のように引き返すものです。意図的に行うものです。パウロは私たちに勧めました、「Iテサ 5:18 すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

そしてここで、外国人であるサマリア人がひれ伏して、感謝しているという事実にも触れる必要があるでしょう。イエス様はその矛盾を、ナザレで説教されていた時に語られました。「ルカ 4:25-27 まことに、あなたがたに言います。エリヤの時代に、イスラエルに多くのやもめがいました。三年六か月の間、天が閉じられ、大飢饉が全地に起こったとき、そのやもめたちのだれのところにもエリヤは遣わされず、シドンのツアレファテにいた、一人のやもめの女にだけ遣わされました。また、預言者エリシャのときには、イスラエルにはツアラアトに冒された人が多くいましたが、その中のだれもきよめられることはなく、シリア人ナアマンだけがきよめられました。」

これは、神は敢えてイスラエル人を癒さず、異邦人を癒されたということではなくて、既に与えられている者たちが、きちんと信仰を持ってその恵みを受け取っていなかったからです。そこにあるからといって、必ずしもそれが自分の身を実現するとは限りません。この過ちをユダヤ人の多くが犯してしまいました。そこにあるからということで、それだけで自分はそれを自分のものにしていくとは限らないのです。神の選びの民だという恵みはそうでしょう。アブラハムの子孫だというだけで、自分は救われていると思っていました。けれども、そこには悔い改めと信仰があって、初めて彼らはその選びを確かなものとする事ができるのです。むしろ、何もないというところに、神の恵みがあることを知り、その人は当然のようにして感謝して過ごすようになるのです。

### 3B 救われる信仰 19

19 それからイエスはその人に言われた。「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」

この清められたらい病に、「立ち上がって行きなさい」と言われます。ここに新しいいのち、人生を感じさせます。これまでは遠く離れたところにいたのに、今は、その真ん中にあることができるのですから。

そして、「あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われます。これは、例えば長血を患う女にも使われた言葉ですし、体が癒されるというところで、「救ったのです」とあります。ところが、ここでは他の九人も癒されたのです、清められたのです。けれども、このサマリア人だけが、「救われた」ということを体験したということです。これは、イエス様のところに戻って来て、ひれ伏して感謝したというところに現れています。霊的に、本当の意味で救われたのです。体だけが癒されても、イエス様のところに行かなければ、それでは滅んでしまいます。体は再び衰え、死に、そしてイエス様から離れた所に投げ込まれます。

あの生まれつきの盲人の時もそうでした。イエス様は弟子たちに、「ヨハ 9:3 この人に神のわざが現れるためなのです。」とあります。イエス様が唾をつけて作られた粘土を目に付けてもらい、それをシロアムの池で洗ったら、目が見えるようになりました。けれども、それが神のわざでしょう

か？違います。彼は、徐々にイエス様に対する見方が変わっていきます。初めは単なる人だったところが、預言者と答え、それから、「9:33 神から出ておられる」とまで言いました。そして追い出されました。その後で、イエス様がやって来て、ご自身が癒されたことを明かされました。すると、彼は、「9:38「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。」とあります。これが、神のわざなのです。

私たちに与えられるまことの救いは、ですから、イエス様の前にひれ伏すところにある救いです。主の前で礼拝していることこそ、それが自分が救われていることを明らかにしています。単に自分の肉体に良いことが起こったということで、救われるのでは決してありません。それらはすべて過ぎ去ります、滅びます。黙示録において、天で救いを受けている人々が何をしているか思い出してください。主に仕え、主に賛美を捧げています。これこそが、救われていることです。

ですから、そこには「信仰」が必要です。信仰とは、漫然としていて恵みを無駄にすることではありません。受動的に生きているのでは信仰とは呼びません。いつも感謝して、意図的に感謝して、神のあらゆる恵みを思い出すのです、何一つ忘れないのです。そうやって、主の前にひれ伏して感謝できるようになり、その礼拝行為こそが自分の救いの実体を表しているのです。